

小児脳腫瘍後の記憶の障害への援助

- 言語的概念の発達を目指した事例 -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
森本 綾

本研究は、小児脳腫瘍による高次脳機能障害により、言語の発達に影響を受けていると考えられるクライアントに対し、個人セラピーとグループセラピーの中で、語彙数を増やすための課題、言語的概念の形成を促進させるための並列処理、チャンクの内容量を増やすための課題を行い、その有効性を検討したものである。

研究1では、セラピーの過程でのクライアントの変化に注目し、クライアントのセラピーに取り組む姿勢が変化した要因について検討した。その結果、クライアントが自分の障害を理解し自覚できるようになったこと、母親から自立して行動できるようになったこと、また、母親の認識の変化が挙げられた。このような変化を経たことで、クライアントは障害を自分の問題として捉えられるようになり、セラピーに取り組む姿勢が変化してきたことが推測された。

研究2では、言語的概念形成のために数学課題で並列処理を、文章理解の課題で、チャンクの内容量を増やすためにマクロ処理を行ったことについて、その有効性を検討した。

その結果、数学課題では左側に問題、右側にヒントを記入したノートを使用し、ヒントにチェックを入れながら問題を解く方法を取り入れたことで、並列処理の速度が上がり、問題の正答率も上昇した。また、数学課題で並列処理を行ったことで、概念形成機能が促進されたことが推測された。文章理解では、単語の大半を抜き出す解決策として、記入する枠を小さくする、抜き出す単語数を限定する、指示を具体的に言葉でノートに示すといった方法を取り入れたことで、抜き出す単語の数が減少し、抜き出すのにかかる時間も短くなった。しかし、いくつかの単語を自分の言葉で一つにまとめることについては、達成することは困難であったと考えられる。

ポストテストの結果では、処理速度が上昇し、類似・単語の粗点が上がり、単語の内容についても説明が一般的で詳細になるといった変化が見られた。また、物語の直後・遅延再生では得点が上昇しており、全体の流れを万遍なく解答することが出来ていた。

以上の結果から、並列処理については、数字や記号については問題なく行うことが出来るようになったが、文章理解では語彙が使用されることで意味的に処理する過程が求められるため、この処理を、文章を読み進める、単語を抜き出すといった作業と同時に行うことが困難であることが推測された。また、語彙数は本人の中では上昇しており、個人セラピーやグループセラピーの中で会話をする機会を増やしたことなどの成果であると考えられた。言語的概念についても、数学処理で並列処理を行ったことで、言語が「句」から「単語の組み合わせ」へと移行し、概念形成機能が促進されたことが推測された。